

2023年10月8日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「神の弱さは人よりも強い」

聖書：

パウロは「十字架の言葉」を聞く者は二分されるという。《十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。》「十字架」とは、忌み嫌われるもの。犯罪者が処刑されるもっとも恐ろしく、醜いものである。ゆえに「キリストが十字架につけられた」とする教えを、「愚かなもの」と言うのは、ある意味当然のことである。神の子が捕らえられ十字架にかけられて殺されてしまう、そんな者が「キリスト（救い主）」と言うのかと。その出来事は躓きのもとであった。

その躓きには、人間側に「神はこうあるべき」という理想があるからであろう。ユダヤ人の神観は力強いダビデ王のような敵をなぎ倒す御腕を持ったものでなければならない、そういう理想があった。ギリシャ人にも同じく理想の神観があった。

では、イエス・キリストはどうして十字架にかかれたのか？神の子が十字架上で苦しまれたのは何故だったのか？そこには二つの意味があるように思う。一つは、ヨハネ福音書3章16、17節に《神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。・・・》他、ヨハネの手紙一の4章。・・・という、私たちに「愛」を示すために「十字架」にかかれたと言う神の愛のゆえにというもの。命を投げ出すほどの「愛」。ただここには、やはり神の「強さ」「勇ましさ」が見え隠れし、ともするとその「強さ」「勇ましさ」だけを神そのものと思いがちになる。

もう一つは、パウロは自らの経験でこう語る。第二コリント12章7節からの言葉に、《わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるように、わたしは三度、主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。》（Ⅱコリント12：7～）弱さの中にこそ、神が宿られるとパウロは語る。イエスの十字架には、私たちへの究極の愛が示され、また私たちが歩むべき道が示されている。

最後に、パウロは十字架のイエスに対してこう語る。「神の弱さは、人よりも強い」と。それは逆に、私の弱さの中に神は強くあるということである。何故なら、弱さの中にこそ、神があるから。十字架は愚かさ、弱さの象徴だが、しかし十字架は、イエス・キリストの生き方、愛そのものである。私たちは、自分の弱さを大いに誇ろう！（神谷）